

My Body My Future

Voices of Change

—変化の軌跡—

Inside the programme
that's strengthening rights,
shifting norms, and
amplifying youth voices

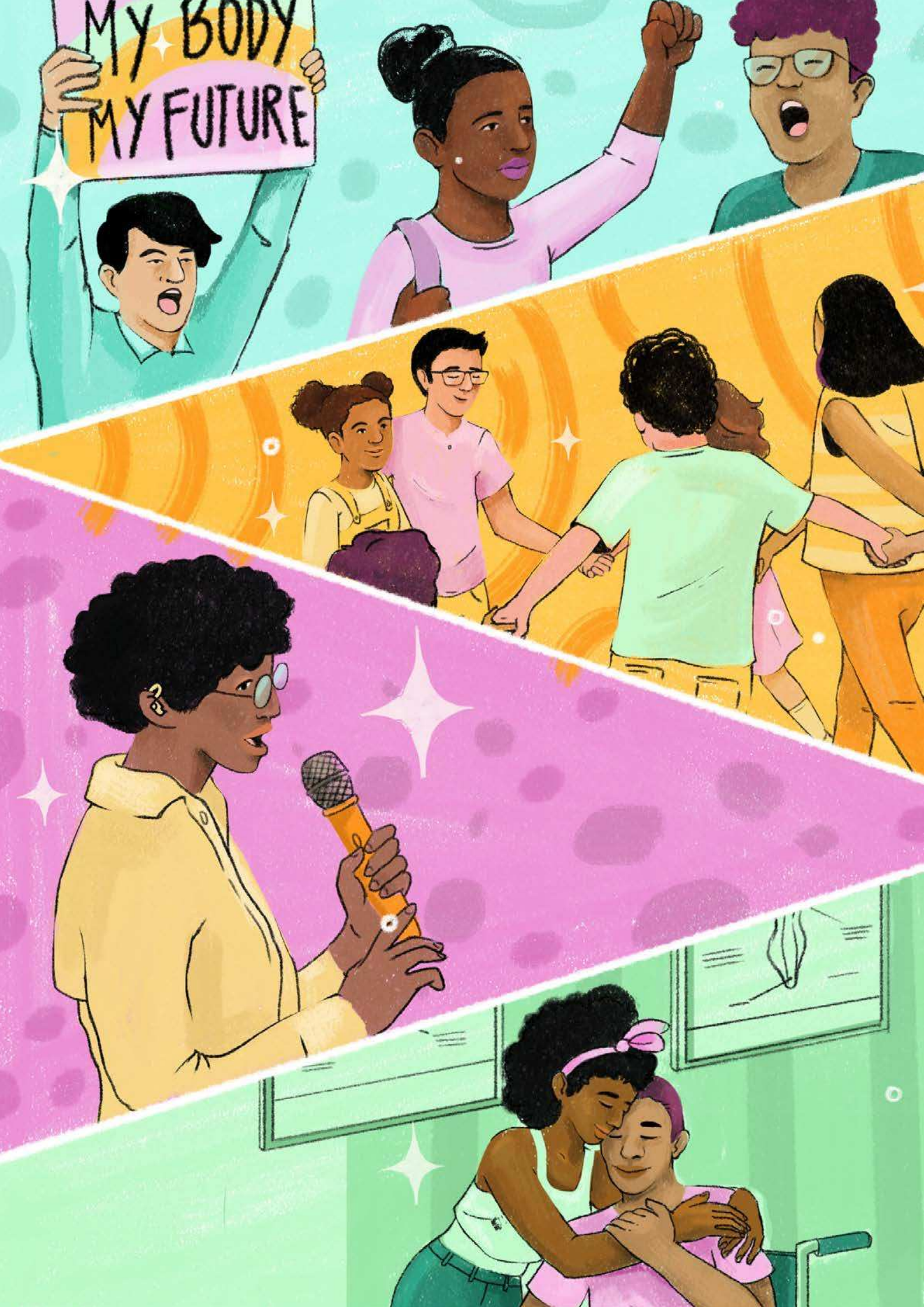
権利を強め、
社会規範を変え、
若者の声を広げるプログラム

**MyBody
MyFuture**

amplifying
voice
Through Dialogue



PLAN
INTERNATIONAL



目次

なぜこれが重要なのか	3
私たちが生み出した変化	5
包括的性教育(CSE)	7
変化の兆し	9
重要な課題についての対話 (CtM)	11
実行されているユースの啓発活動男性	13
性の変革	15
支援的環境	17
Building Bridges	19
気候変動に対するレジリエンス	21
経済的エンパワーメントとSRHR協働に	23
よる革新	25
謝辞	27

序文

読者の皆様へ、

国際的組織としてプラン・インターナショナルは、性と生殖に関する健康と権利(SRHR)が、世界中の思春期の若者とユースの全体的な幸福・尊厳・将来にとって必須であると理解しています。

あらゆる思春期の若者・ユースは、多様な背景や状況にかかわらず、自分の身体に関すること、結婚するかどうか、結婚するなればいつ・誰とするか、子どもを持つかどうか、子どもを持つならいつ持つかなど、自らの人生に関わる重要な選択について、十分な情報に基づいて自ら決定する権利を有しています。プラン・インターナショナルは、すべての思春期の若者・ユースが、性的な喜びを含むSRHRに関する情報やサービスへアクセスできるよう支援することで、この権利の実現に取り組んでいます。これは特権ではなく、基本的人権であり、社会正義の実現に関わる重要な課題です。

その取り組みは、私たちが注力する、ジェンダー・トランスフォーマティブで包摂的なSRHRプログラムである「My Body My Future(MBMF)」の中核を成しています。フィンランド外務省の資金提供を受けるMBMFは、プラン・インターナショナルのSRHRプログラムおよび政策・社会への働きかけのモデルに基づいて実施されています。これらは、国際的な優良事例を踏まえた、エビデンスに基づくセックスポジティブなモデルです。

本報告書では、MBMFの継続プログラムである「My Body My Future 2(MBMF2)」の取り組みを紹介しています。エチオピア・ラオス・ミャンマー・モザンビーク・ウガンダ・ジンバブエで活動するユースやパートナーの声と、プログラムの成果を示すデータを通して、MBMF2で得られた知見・教訓・成果・実施の過程で直面した課題を紹介します。

MBMF2により、思春期の若者とユースは自身の身体や将来に対し自身で選択できるよう、エンパワーメントされてきました。その権利を求める声は、今も高まり続けています。この取り組みはまだ道半ばであり、優先的に実施していかなければいけません。国連が掲げる、持続可能な開発目標(SDGs)の実現に不可欠なものであり、SDGs達成期限である2030年まで、あと4年しかありません。

プラン・インターナショナルは、世界中の思春期の若者・ユースのSRHRの推進において、豊富な実績と専門性を有しています。80以上の国と地域で活動し、MBMF2が示すように、各国政府・地方自治体・市民社会組織(CSO)・SRHRの推進に取り組むユース主導の団体やユース、そのコミュニティと長期的かつ強固なパートナーシップを築いてきました。適切かつ継続的な資金提供と支援、そして多様な主体との連携があれば、持続的な社会変革を実現することができます。その中心となるのは、多様な若者が変革を主導し、互いに協力しながら未来を切り拓いていくことです。

AnnukkaとEmebet



「あらゆる思春期の若者・ユースは、十分な情報に基づき、自らの人生に関する重要な決定を自ら下す権利を有しています」



Annukka Von Kaufmann

プログラム責任者、
プラン・インターナショナル・フィンランド



Emebet Wuhib-Mutungi

グローバルSRHRプログラムリーダー、
プラン・インターナショナル

なぜ 重要なのか

世界には、自身の身体や将来に関する選択の自由や情報を持つことができていないユースが非常に多い。MBMF2は、その現状を変え、子ども・思春期の若者・ユース(CAY)がSRHRを享受できるよう、複雑で根深い社会や文化、経済・政治的障壁に立ち向かうことを目指し、設計されたものである。

こうした障壁は、ジェンダー不平等、思春期の若者・ユースの性に対するスティグマ、有害な社会規範など、さまざまな形で存在する。障害のあるユースや、多様な性的指向・性自認を持つユースなど、複数の障壁が重なり合う人びとは、より深刻な影響を受けている。これらの障壁は、不平等な力関係や、差別的かつ制約の多い法律・政策によってさらに強化される。貧困や生殖に関する保健サービスへのアクセスの制限は、SRHRが実現されない原因であると同時に、その結果でもあり、悪循環を生み出している。また、進歩的な法律が存在する場合であっても、その執行が不十分であったり、反発によって実施が妨げられたりすることが少なくない。

数十年にわたり世界的に取り組みが行われているが、ジェンダー平等とSRHRの実現に向けた進展は、依然遅々として進まず、進捗にはばらつきがみられ、脅威に晒されている。MBMFは、変化の推進を望むユースからの高まる要望に応える形で設計された。

MBMF2の中核にある考え方は、思春期の若者・ユースを誰一人取り残さないことである。それは、すべての思春期の若者・ユースが情報やサービス、支援にアクセスする際の障壁を、積極的に取り除くことである。MBMF2では、安全で自分が尊重される空間を確保し、アクセスできるようにすることで、あらゆるユースが参加し、意見を言うことができ、自身の身体や将来に関して情報に基づいて選択できるようにした。

私たちは、現地のパートナーとの連携により、あらゆる思春期の若者とユースが、自身の疑問や不安に対する答えを得られ、自信を持って自身の身体・将来・人生に関して情報に基づく選択を下せる世界を構築できると確信している。

図のデータ出典: 図1 MBMF2ベースライン調査(モザンビーク)、図2 MBMF2ベースライン調査(エチオピア)、図3 MBMF2ベースライン調査(ミャンマー)

自分の性について話すには、
誰が信頼できるのだろうか

指導者に私たちが経験している問題を
聴いてもらうにはどうすればよいのか

Why is it so
hard to get
contraceptives?

I wish I had
someone to
talk to about
how I feel

知るべきことを知るには
どうすればよいのか



MBMF2は、SRHRに対し、包括的でジェンダー・トランスフォーマティブ・アプローチを取り、サービスや教育だけではなく、それらを形成する制度や規範にも着目し、新しく革新的な手法による問題解決に取り組んだ。

貧困がSRHRに悪影響を及ぼし得ることを踏まえ、MBMF2では、収入創出活動や雇用機会の拡大につながるスキルの習得を支援した。また、危機的状況下では思春期の若者・ユースの脆弱性が一層高まることを踏まえ、紛争・気候変動による災害・他の緊急事態下でもSRHRが確保されるよう、レジリエンス強化にも取り組んだ。さらに、性や恋愛に関する教育が、ユース本人だけでなく、その周りの人びとも大きな変化をもたらすことを認識し、MBMF2は学校内外における包括的性教育(CSE)を推進するとともに、思春期の若者・ユースが十分な情報に基づいて健全な意思決定を行えるよう支援した。

思春期の若者とユースがSRHRの享受の実現に対して直面している困難を理解することで、MBMF2は対応が必要な課題に対し、真に包括的な対応策を構築できた。

直面する課題

- 女の子と男の子に期待される役割や振る舞いを規定する社会規範や慣習は、健康や自己決定権を損うだけでなく、命や将来に深刻な影響を及ぼすことが多い。
- 多くのユースはCSEを受ける機会がほとんどなく、保護者も、子どもの思春期・恋愛・性と生殖に関する健康(SRH)のニーズに適切に対応するために必要な情報やスキルを十分に備えていない。
- 貧困や経済的不平等は脆弱性を高め、女の子と女性の中には、対価を伴う性行為や早すぎる強制された結婚(CEFMU)などの有害な状況に置かれる人も少なくない。
- 支援が提供されている場合であっても、思春期の若者・ユースや障害のある人びとに特有のニーズがSRHサービスにおいて十分に考慮されることは稀であり、その結果、彼らは依然としてSRHサービスを享受できない状況に置かれている。
- 気候変動や他の危機は新たな圧力を生み出し、必要不可欠なSRHサービスへのアクセスを妨げ、不平等を悪化させ、ユース、特に女の子をより深刻な危険に晒している。
- 社会規範・ジェンダー規範の変革を目指す活動や、SRHRに取り組むCSOに対する規制は、それらの活動を制限し、本来最も耳を傾けるべき人びとの声を封じ込めてしまう。



私たちが生み出した変化

MBMF2は、ユースのSRHR実現を阻む問題に対する包括的な対応だった。MBMF2は4年間実施されたMBMFプログラムを基盤とするものであり、ブラン・インターナショナル・フィンランドが主導し、MFAから資金提供を受け、2022年～2025年にエチオピア・ウガンダ・モザンビーク・ジンバブエ・ラオス・ミャンマーで実施された。MBMF2は、ブラン・インターナショナルの各国別事務所・コミュニティベースのグループ・ユース/女性/LGBTQI+に属する人びと/障害のある人びとと主導の組織を含む、31の実施パートナーとの連携により実施された。

MBMF2は、SRHRの推進に当たり、包括的なジェンダー・トランスフォーマティブ・アプローチを採用した。10歳～24歳の多様なCAYだけでなく、彼らを取り巻くコミュニティや関係機関とも直接連携し、6カ国すべてにおいて、ジェンダー・トランスフォーマティブで包摂的な取り組みを通して、不平等の根本原因に働きかけた。特にモザンビーク・ミャンマー・ラオス・ジンバブエでは、障害のある人びとやLGBTQI+の思春期の若者・ユースを重点的な対象として事業を展開した。

MBMF2は、ブラン・インターナショナルのジェンダー・トランスフォーマティブ・アプローチに基づいて実施された。このアプローチは、持続的な変化を実現するためには、関連する課題を分野横断的に捉え、包括的に取り組むことが不可欠であるとの考え方に基づいている。各分野を個別に扱うのではなく、それぞれの要素が相互に補完し合うよう統合的に事業を展開した。具体的な取り組みは以下の通りである。

- ジェンダー規範を変え、それを今後も継続させること
- 女の子とユース女性の主体性を向上させること
- 男性性の変革のため、男の子と男性を参加させること
- 女の子とユース女性のための平等を実現させていくこと
- 包摂性を保証すること
- 女の子の権利を守るための支援環境を創出すること

目指す効果

あらゆるCAYが、自身の身体と将来の決定権を有し、健全で安全である支援的な環境で生活できるようになる

成果 1: CAYがSRHRに関して、十分な情報に基づいて選択し、意思決定を行えるよう支援する

MBMF2は、全対象国において学校内外でCSEの実施を拡大するとともに、各国の状況に応じて内容を調整し、気候変動に関する学習内容も取り入れた。その結果、障害のあるCAYを含む10歳～24歳の約5万7,000人が、継続的にCSEプログラムに参加した。また、一部の国では、SRHRの推進とグリーン・トランジションの促進を目的として、若者の経済的エンパワーメントにつながるライフスキルやグリーンスキルをプログラムに組み込んだ。さらに、1,100人超の思春期の若者・ユースが職業訓練や起業に関する研修を受講し、その結果、SRHサービスの利用促進にもつながった。ラオス・ウガンダ・モザンビークでは、授業や学校のクラブ活動を通じて質の高いCSEを提供できるよう、計730人の教師が研修を受講した。

成果 2: 質が高く包摂的なSRHサービスへのアクセスを向上させる

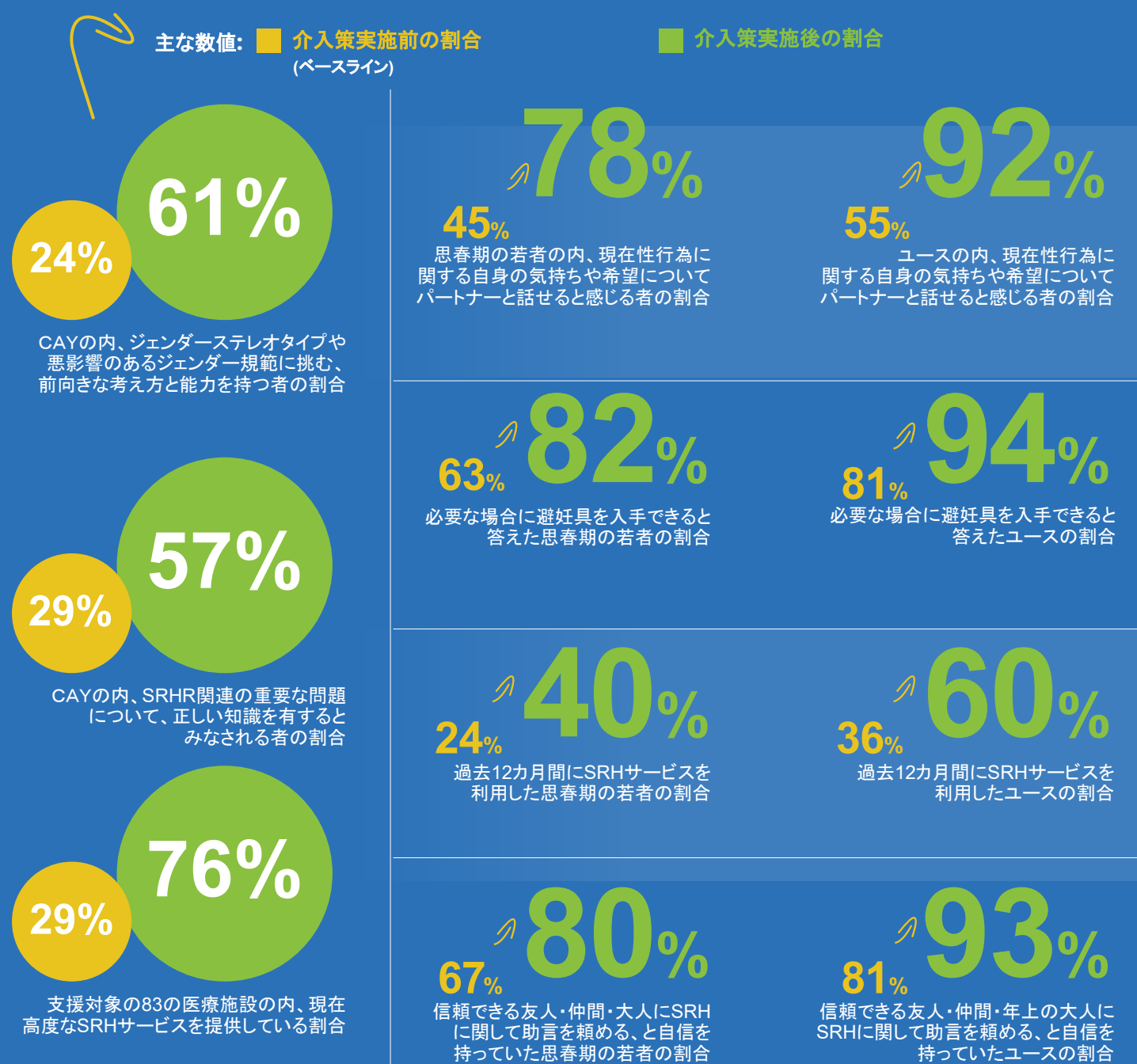
MBMF2は、SRHサービスを提供するCSOのパートナーや政府の保健医療機関と連携し、ユース向けSRHサービスの質の向上に取り組んだ。具体的には、サービス提供者への研修・価値観の明確化・障害のある人びとの包摂の推進・技術支援・医療施設の改修・ユース向けコーナーの設置、さらにウガンダでは医療施設を拠点とするピアナビゲーターの配置などを実施した。また、一部の国では、ユースがサービスの計画・監督に有意義に参画できるよう支援したほか、移動型診療によるサービス提供や紹介・紹介受診体制の整備も進めた。これらの取り組みを通じて、地理的条件からサービスへのアクセスが難しい地域も含め、年齢や障害の有無にかかわらず、ジェンダーに配慮したSRHサービスの提供体制が強化された。その結果、全対象国で計83の保健医療施設がMBMF2の支援を受け、786人のサービス提供者が、質が高く、包摂的で、年齢とジェンダーに配慮したSRHサービスを提供するための研修を受講した。

成果 3: 有害な社会規範の変革を促す、安全で支援的なコミュニティの構築

MBMF2は、SRHRに関する差別的な社会規範の変革を促すため、コミュニティ対話・世代間対話・子育てセッションの実施や、コミュニティの文化的・宗教的指導者との連携を進め、計4万261人のコミュニティ住民に働きかけた。また、一部の国では、約4,000人のユースが参加する村落貯蓄貸付組合・収入創出活動・災害リスク軽減(DRR)委員会などを通じて、気候ショックや気候変動が家計や生計に及ぼす影響の軽減を支援した。これらの取り組みは、CAYがSRHRを実現しやすい環境づくりにも寄与した。

成果 4: SRHRの推進に向けたCSOと若者による政策提言・働きかけの強化

MBMF2は、CSOのメンバーへの研修・気候変動やSRHRに関するユース主導の啓発活動支援・強力なSRHR関連の政策と公的投資の推進に重点を置いたが、それによって強固な支援体制が整備された。



包括的性教育（CSE）

プラン・インターナショナルの上級SRHR顧問、Leena Mubarakは、学習者の居住地に関わらず、情報に基づく判断・危害の回避・不平等な規範への対応として、CSEが非常に有効であると語る。

CSEはMBMF2の基盤であり、単なる生物の授業ではない。CSEは、ユースが自身の身体・恋愛・権利を理解すると同時に、極めて重要なライフスキルの習得を支援する、体系的で包括的な学習過程である。CSEに注力することで、思春期の若者が自身の幸福を守れるようになり、コミュニティでの安全な環境づくりがなされ、長期的なジェンダー平等の基盤を構築できる。

MBMF2の大きな強みの一つは、CSEが政治的な問題として捉えられ、実施にさまざまな制約が課される状況においても、継続してCSEを提供できたことである。そのためには、コミュニティや関係機関との信頼関係の構築と緊密な連携、そして学習者のニーズや文化的文脈に配慮した内容を提供することが重要であった。

MBMF2では、教師・ピアファシリテーター・ユースワーカー・医療従事者・保護者・コミュニティのアクターなど、多様な主体が関わり、複数の手法を組み合わせることでCSEを実施した。こうした取り組みは、学校でのCSEの実施が制限されるような厳しい環境において特に効果を発揮した。そのような状況では、ピア・ツー・ピア学習/課外クラブ/コミュニティを拠点とした学習などの代替的なアプローチが、思春期の若者・ユースにCSEを届けるための、安全かつ受け入れられやすい方法として不可欠であった。

CSEは、解剖学・二次性徴・恋愛・ユースの生活を形成する広範な社会的規範など、あらゆる面を網羅するものであり、学習者が情報に基づく判断を下し、危険を回避し、不平等な規範に立ち向かうことを支援するものである。私たちのセックスポジティブで包括的な権利に基づく取り組みを、思春期の若者・ユースが直面している現実に対応し、彼らが必要な情報やスキルをベストなタイミングで得られるようにさせることが、最も重要である。

ラオスでの包括的なCSEの拡大

ラオスでは、思春期の若者(特に不就学のユース・少数民族の女の子・障害のあるユース)に対するCSEの提供拡大において、大きな前進がみられた。CSEは国の定める教育課程に含まれてはいたが、デリケートなテーマも多く、それらに関する指導は依然として困難であり、誤った認識によりユースが情報を入手できないままだった。それに対し、私たちは教師の能力強化・就学中・不就学の思春期の若者双方を対象とした、状況に合わせたCSEセッションの実施・スティグマの軽減と対話の場の確保のための、保護者やコミュニティリーダー参加型の取り組みを行った。

MBMF2は、ボーケーオ県とウドムサイ県の45の村で実施され、1万1,000人超のユースと2,800人の保護者・教師・医療従事者・リーダーが対象となった。ユースは、今ではSRHRに関して、情報に基づく判断を下すための確かな知識・自信・スキルを習得している。保護者・リーダー・サービス提供者は、ユースのニーズに応えるために支援体制を強化し、対応能力を改善させた。政府と国連人口基金(UNFPA)との共同開発による、柔軟で包括的なMBMF2の取り組みは、リソースが乏しい地方部の多様なユースに手を差し伸べるための実践的な形態となっている。

あらゆるユースに手を差し伸べる

政情不安への適応: ミャンマー

ミャンマーは、全対象国の中で最も困難で不安定な環境下にある国の1つだが、そこでもCSEは実施された。同国のCAYは、長年の紛争・強制避難・市民活動空間の縮小・2025年に起きた大地震の影響に苛まれていた。コミュニティ組織や基本サービスは機能不全に陥り、SRHRに関する議論は、保守的な文化的規範により制限され続けていた。

このような状況では、標準的な方法でCSEを実施することが難しい場合が多く、各現地の状況に応じて設計された柔軟なアプローチが、MBMF2の成功に不可欠であった。CSEの内容は、現地の文化・慣習、安全面や事業運営上の制約を踏まえ、現地職員とパートナーが共同で作成した。現地の状況に配慮し、周囲の注意を引かないようモジュール形式で構成するとともに、思春期の若者・ユースとその家族が直面するさまざまな障壁を踏まえて内容を設計した。

同国では、パートナー団体やUNFPAと連携し、プラン・インターナショナルのCSEカリキュラムを基に、多くのCSOが共通のCSEプログラムを実施した。また、プラン・インターナショナル・ミャンマーは、このCSEプログラムに関する調整グループの共同議長を務めた。同グループは、CSO同士が経験や知見を共有し、それぞれのCSEプログラムの質を高めるための協議の場となった。さらに、プラン・インターナショナル・ミャンマーにとっても、国内のCSEの実践に広く働きかけ、その質の向上を後押しする機会となった。

安全上の懸念と思春期の若者の多くが正規教育外にいる状況を踏まえ、CSEは現地のファシリテーターにより、小規模で安全な学習空間で実施された。それらのファシリテーターは、自身がいる地域の事情を熟知しており、地域に合わせた形での対応が出来たため、学習体験を損なわせることなく、状況の変化に応じたMBMF2の柔軟な調整が可能となった。

大人の多くがCSEに対し不安や誤解を抱いたりしていたため、プラン・インターナショナル・ミャンマーは保護者を対象とした啓発セッションを実施した。それらのセッションは、保護者の労働時間や安全面を考慮し、保護者の生活の負担にならないよう計画された。短時間のセッションでは、正確な情報の提供・広く信じられていた誤解の解消・思春期の若者と十分なコミュニケーションを取るための簡単な子育てスキルを共有した。その気軽に親しみやすい形式は、保護者への接し方として有効であることが証明され、信頼関係構築の重要な手段となった。

プラン・インターナショナル・ミャンマーが採用した手法は、ミャンマーの複雑で不安定な状況に対応し、レジリエンスを備えた現地主導のものであった。MBMF2のミャンマーでの活動は、現地のリーダーシップ・配慮ある設計・信頼関係構築への献身的な取り組みによって、ユースが自身の権利を実現するために必要なCSEを、効果的に提供できることが分かった。

状況に応じる柔軟性: CSE活動カード

東・南部アフリカでは、さまざまな状況に対応できる柔軟な手法として、CSEセッションで活用できるカード型教材を導入した。この教材は適応性が高く、ウガンダ・エチオピア・モザンビーク・ジンバブエでは、それぞれ異なる政治的・文化的背景の下でも有効かつ実用的であることが実証された。このCSEカード教材を活用することで、計2万5,000人のCAYにCSEを提供することができた。

CSEの実施では、扱う内容が広範囲に及ぶため十分に実施できないこと・CSEの目的や対象範囲に対する誤解・ファシリテーターへの支援不足・政治的な介入などが、共通する課題となっている。MBMF2で開発したカード教材は、ファシリテーターが地域のニーズに応じて柔軟に内容を選択・調整できるよう設計されており、CSEを実施しやすくすることに貢献した。

この教材により、各地域の状況に応じて実施方法を柔軟に工夫することが可能となった。例えばウガンダでは、CSEに対する厳しい規制がある中、学校の課外クラブを活用してCSEを実施することで、MBMF2は学習者に質の高いCSEを提供した。セッションはピア学習形式で行われ、教師は安全性の確保と継続的な実施を支援した。課外活動という形態を採用することで、デリケートなテーマを適切に扱いながら地域社会の反発を避け、有意義なCSEの実施を可能とした。

一方、他の国々では、CSEを実施しやすい環境が整っていた。例えばモザンビークでは、カード教材を用いたCSEセッションが、学校内外でCSEとして正式に実施された。政治的な制約が比較的少なかったことから、実施方法や用語を変更する必要はなく、教材をそのまま活用することができた。

すべての実施地域において、ファシリテーターは一貫して、カード教材の実践性と使いやすさを高く評価した。分かりやすい構成は、ファシリテーターの自信を高めるとともに、短時間で実施できるセッション形式は、学校の時間割やユース向けプログラムにも組み込みやすかった。また、こうした特徴により、学校や地域の教育関係者からも理解と支持を得やすかった。カード教材の活用成果は、教材を地域の状況に応じて適切に設計することで、環境上の制約の程度にかかわらず、質の高いCSEを実施できることを示している。

プラン・インターナショナルのCSEに関する取り組みの詳細は、以下を参照のこと:
plan-international.org/srhr/comprehensive-sexuality-education

変化の兆し

プラン・インターナショナルのジェンダー・包摂担当上級顧問であるHenry Salasは、社会規範分析を通じて、人びとの考え方・意思決定・行動に影響を及ぼす暗黙のルールやステレオタイプを深く理解することができたと言っている。

MBMF2全体を通じて得られた最も重要な教訓の1つは、持続的な変化を実現するには、行動変容だけでなく、その背景にある要因にも働きかける必要があるということである。真に意義ある変革を実現するためには、健康・ジェンダー・アイデンティティに関する人びとの選択を形成する社会規範や/権力関係/根深く存在するステレオタイプを調査・分析しなければならない。社会規範分析は、まさにそうした根本的な要因を明らかにするための取り組みである。

私たちの社会規範分析では、人びとの行動の背景にある、普段は意識されることの少ない考え方やステレオタイプ、暗黙のルールといった根本的な要因を明らかにすることができた。各国で社会規範分析を実施したことで、SRHRの取り組みに新たな視点と示唆がもたらされた。エチオピア・ラオス・ミャンマー・モザンビーク・ウガンダ・ジンバブエの各国チームは、2022年と2025年に社会規範分析を実施した。分析結果を踏まえ、現状把握だけでなく、今後起こり得る変化を見据えた検討や、新たな対話を行った。その結果、プログラムチームは目指す変化の理論を見直し、その実現に向けた戦略を再構築した。

2回分の調査データを体系的に比較することで、本プログラムによる、規範やコミュニティの考え方、行動の経年変化の追跡も可能となった。戦略的に質的調査と詳細な分析に注力することで、規範が細かく複雑に変化していく過程に関する深い知見が得られ、思春期の若者・彼らの家族・コミュニティ・サービス提供者が、集団としての行動や信念にどんな影響を与えているのかという構造が明らかになった。

国別調査では、思春期の若者・彼らの家族・医療従事者・教師・コミュニティリーダーが、どう根強い規範に協力して立ち向かい、対話を促し、徐々に考え方を再形成させていったか明らかになった。それらの調査結果は、MBMF2がサービス提供だけでなく、様々なレベルでジェンダー・トランスフォーマティブな社会変革を促し、それによりユースが自身の身体と将来について考え、その主導権を保持できるようエンパワーメントされたことを示していた。

データが示すもの：沈黙から対話へ

2022年～2025年に実施した分析では、一貫した変化の傾向が確認された。ユースは主体的に行動するようになり、これまで性や生殖に関する話題を覆っていた沈黙や恐れを乗り越え、自らの意思に基づいて行動する姿勢が見られるようになった。また、自身の性と生殖に関する選択について自信を深め、仲間・保護者・コミュニティ住民との対話の機会を積極的に生み出していた。

保護者・教師・医療従事者・若く進歩的な宗教指導者も、彼らを積極的に支える役割を果たしていた。例えばモザンビークでは、教会での説教の中でも、避妊を選択する権利について語られるようになっていた。こうした変化は、従来のタブーを打ち破るだけでなく、避妊を教育の継続やウェルビーイング、将来の機会を支えるための手段として捉え直す動きにもつながっていた。さらに、コミュニティでは、SRHについての前向きな考え方は、現地の文化的・道徳的価値観と両立し得るという認識が広がっていた。

これらの調査結果は、沈黙と恐れから、対話・受容・エンパワーメントへと社会が変化しつつある姿を明確に示していた。こうした初期の変化は、私たちの取り組みが、ユース一人ひとりが十分な情報に基づいて意思決定できるよう支援しただけでなく、そのような選択を可能にする環境そのものにも変化をもたらしていたことを示唆している。ユースが示したレジリエンス・勇気・創造性は、彼らの力を信じ、そこに投資することで、社会変革は実現できるという確かな希望を私たちに与えてくれるものである。

取り組みは続く

こうした取り組みには、多くの困難が伴った。社会規範に働きかけることは、性・権力関係・アイデンティティといったデリケートなテーマに向き合うことでもあり、変化が直線的に進むことはほとんどない。重要なのは、対話を継続できる場を確保するとともに、新たな価値観との文化的アイデンティティやコミュニティの価値観が共存できる環境を築くことである。その均衡を保つことは容易ではないが、持続的な変化を実現するためには欠かせない。真の変革は、強制によってではなく、対話と協働を通じて実現するものである。

前進が見られる一方で、根深く残る社会規範は、依然として思春期の若者の性に関する意識や行動に大きな影響を及ぼしており、特に女の子は、強いスティグマ・周囲からの批判・反発にさらされることが少なくない。保守的な宗教指導者・一部の保護者・コミュニティ住民の中には、依然として避妊具の使用に否定的な姿勢を示す人びともおり、ユースは相反する価値観の狭間で、自らの選択を模索し続けなければならない状況に置かれている。さらに、障害のあるユースや不就学のユースは、疎外に依る複合的な障壁に直面している。

こうした取り組みは、一度限りで終わるものではなく、長期的かつ継続的に実施するとともに、継続的な投資によって強化していく必要がある。初期段階で現れる変化を捉えることで、進捗を把握し、変化の過程を着実に評価することが可能となる。それは、持続的な効果を実現するために不可欠である。各国で得られた成果は、社会規範は変えられるものであり、変化は実現可能であることを示している。

今後に向けて

社会規範分析の大きな意義の1つは、パートナーが複雑な社会変革について共通の理解のもとで議論できる枠組みを提供したことである。社会規範分析は、まずユースのウェルビーイングを妨げている行動を特定することから始まる。次に、その行動を形成するステレオタイプ・社会的制裁などの社会規範や、その行動に影響を与え、促進/抑制している集団を分析する。そして、こうした知見を基に、現実的で真に変革につながる介入策を設計していく。この過程は、自らの組織の在り方を率直に見つめ直す契機にもなった。すなわち、自らの組織の制度や実践が、有害な社会規範を強化しているのか、それとも変革を後押ししているのかを問い直す機会となったのである。その結果、多くのパートナーは、職員研修の実施方法/コミュニティファシリテーターへの支援体制/ジェンダー・包摂を監督の枠組みにどう組み込むかの見直しを進めた。この過程を通じて、単に活動を実施するだけでなく、自らが目指す変化を組織として体現することへの意識が一層高まった。

社会規範分析の効果はすでに可視化されている。いくつかのMBMF2実施対象国では、社会規範分析から得られた知見に基づき、各チームが重点分野を精査し、政府やCSOとの連携強化を進めることにより、広範にジェンダー・トランスフォーマティブな戦略の策定に寄与した。



ジェンダー・トランスフォーマティブなプログラムが求められる理由

持続的な前進は、不平等な権力関係・固定的なジェンダー規範・人びとの日常生活を形づくる構造的な障壁といった、ジェンダー不平等の根本的な要因に働きかけることによって初めて実現する。私たちのすべての取り組みは、この考え方を基盤としている。私たちのプログラムは、不平等によって生じた問題への対処にとどまらず、その根本原因に働きかけることを目的としている：権力関係の変革・ジェンダーステレオタイプへの挑戦・女の子/ユース/コミュニティの可能性を制約している権力構造そのものを変えていくことを目指している。

重要な課題についての対話 (CtM)

MBMF2 は、ユースの人生に変化をもたらすだけでなく、その取り組みを支える人びと自身の変化にも着目した¹⁾組「重要な課題についての対話(CtM)」は、職員とその価値観に焦点を当てた取り組みである。CtMは、SRHRの主要な課題に関する職員の知識と理解を深めるとともに、自らの価値観や姿勢を振り返り、プラン・インターナショナルのSRHRに関する方針との整合性を高めることを目的としていた。さらに、世界各地で展開するプログラムにおいて、SRHRに関する慎重かつ正確で、一貫性のある見解と実践を確保することも目的としていた。

プラン・インターナショナル・ウガンダのプロジェクトマネージャーであるMartin Ogwangは、当初、その研修が自身にもたらすメリットを理解できなかった。彼は、ユースの保護とエンパワーメントが意味することを、すでに自身が理解していると考えていた。2024年に実施されたCtMの外部学習評価の中で、彼はその研修が自身の考え方やユースとの関わり方を根本的に変えたと言った。

「私はこれまで3回CtM研修に参加してきました。最初に参加したのは2019年、ヘルシンキで開催された研修です。それは私にとって大きなカルチャーショックでした。そして、自分自身の価値観を深く見つめ直す機会となりました。2週間の研修の前半、私はほとんど発言することなく、当時の私にはとても理解し難いと感じる話に耳を傾けていました。それは、自分自身の考え方や価値観と向き合う深い内省の時間でした。これまで理不尽だと思っていたテーマについても、改めて考えさせられるようになりました。最初の内は、この研修を受け入れようとは思っていませんでした。『自分の国では誰もこんな話はしないのに、なぜ耳を傾けなければならないのだろう』と感じていたのです。それでも、研修で得た学びは強心に残り、帰国後にその内容について語り合える相手はいませんでした。自分自身の価値観を改めて見つめ直し続けるきっかけとなりました」

「私はそこが、誰にも攻撃されずに自身の価値観を問い直すことができる、安全な場であることに気づきました。それが私の変化の始まりであり、自身が抱いていた根深い価値観の再考のきっかけとなりました」

「2回目の研修は2021年にウガンダで行われ、多くのプラン・インターナショナル・ウガンダの職員が参加していました。それまでには、私は自身のいくつかの価値観に関し再考し、ワークショップで発言できるようになっていました。しかし、職員にとってそのワークショップは大変難しいものであり、彼らの半数が、そうした話し合いを傾聴することができず、途中退席してしまいました。彼らの中には、より時間を必要とした者や、研修に関して有害な意見を広める者さえいました。彼らは各々、研修に対して否定的な見方を抱いていました」

「私の3回目の研修は、ファシリテーター養成研修でした。その時点で、諸テーマを概念化し、自身の価値観に向き合い、それらを変え、さらに自国で起きている事態と結びつけることを強く決意していました」

自身の変化の過程から得た教訓

「私が学んだ重要な教訓の1つは、個人に深く根付いている価値観を完全に变えるには、1回の研修だけでは不十分である、ということです。その変化は長い道のりであり、多くの人は、研修の継続が必要です」

「価値観を見つめ直すためには、研修を実施する環境も極めて重要です。私にとっては、自国を離れて研修に参加できたことが大きな意味を持ちました。そこでは、誰かから批判されたり非難されたりすることなく、自分自身の考え方を安心して見つめ直すことができました。もし自国であれば、それは難しかったと思います。人が価値観や考え方を見つめ直し、変化していくためには、そのための安心できる環境が欠かせません」

「もう1つの重要な教訓として、言葉の問題が挙げられます。私たちが使う言葉は規範や価値観の影響を受けており、その中には『攻撃的』なものもあります。例えば、女の子の恋愛を描写する言葉の中には、数多くの有害な表現が見受けられました。それらの規範は、実質的にどんな法的枠組みよりもずっと強い影響力を持っています」。

「自分自身の価値観が、意思決定の在り方に大きな影響を及ぼしていました。研修を通じて、物事を異なる視点から見ることができるようになりました」

視点の変化

「自分自身の価値観や思い込みが、私の意思決定に影響していたことに気づきました。私はプログラム管理やリーダーシップを担う立場にあったため、自分の視点こそが正しいものだと考えていたのです」

「CEFMUをなくすための最初のプログラムを立ち上げた当時を振り返ると、私は宗教的な価値観に基づき、『女の子と女性をCEFMUや早期妊娠から救う』という発想でこの問題に取り組んでいました。当時の私は、性と生殖に関する権利という視点を持っておらず、女の子の声に耳を傾けることの重要性さえ十分に理解していませんでした。彼女たちの権利について考えるのではなく、『それは罪である』と教えられ、その価値観を当然のものとして受け止めていたのです」

「CtM研修は、私の考え方を大きく変えました。そこで学んだのは、重要なのは女の子の性を管理・統制することではないということです。それまで私が作成した最初のプログラムは、女の子の権利ではなく、彼女たちの性を管理することに重点を置いていたのだと気づかされました。CtM研修を経て、私の考え方は根本から変わりました。今では、女の子やユース女性の権利という視点から物事を考え、彼女たちが自らの権利を行使できるようエンパワーメントを支援しています。それは、私の世界観そのものが変わるほど大きな転換でした。以前は、女の子やユース女性を『守るべき存在』と考えていました。しかし今は、彼女たちを権利の保有者として捉え、その権利の実現を支えることこそが重要だと考えています。大切なのは、権利保有者である彼女たち自身がエンパワーメントされることです。今の私は、ユース女性が自らの権利を守り、実現できるよう支えるファシリテーターとしての役割を担っています。これは、私にとって根本的な変化でした。私自身が前面に立つ導くのではなく、一歩後ろから彼女たちを支え、彼女たち自身が権利を実現できるよう後押しする役割へと変わったのです。その結果、女の子は十分な情報に基づいて自ら意思決定できるようになり、私が常に最前線に立つ必要もなくなりました。今では、最前線に立っているのは女の子や男の子自身です」

実践を通じて変革を定着させる

「参加者として3回、ファシリテーターとして2回CtM研修に携わった経験を通じて、私は自分自身の価値観を継続的に見つめ直すことができました」

「その変化は、私たちが実施するプロジェクトの企画や運営を通じてさらに深まりました。今では、自らの価値観や思い込みを振り返ることは、プロジェクトを進める上でも、パートナーと協働する上でも欠かせない姿勢となっています。当初、私たちはCEFMUから思春期の女の子を『救う』ことを目的に、結婚生活から離れさせて実家へ戻す支援を行っていました。しかし、多くの女の子は1年以内に再婚したり、妊娠したりしていました。その経験から、私たちは自分たちのアプローチ自体を見直す必要があると痛感しました。救出という使命は、有効ではなかったのです。現在、ユース女性は避妊を含むSRHRの享受の実現をしています。実施段階で現場でユースと協働する方が、効果的であることを実感しています」

「CtMを通じた価値観の変化は、時に孤独なものです。自分自身は社会規範と向き合い、望ましい変化を実現したいと考えていても、それをすぐに周囲へ伝えられるとは限りません。特に、宗教団体や固定的な価値観を持つコミュニティの人びとと関わる場面では、その難しさを強く感じます。急に考えを伝えれば、かえって相手の反発を招いてしまうこともあります。そのため私は、まず自分自身の行動変容から始め、例えば、それまで育児を妻に任せきりでしたが、自ら娘たちと向き合い、積極的に子育てをするようになりました。そうした行動を続けているうちに、人びとから『なぜ変わったのか』と尋ねられるようになり、そのタイミングで初めて対話を始めることができたのです」

「パートナーの職員を対象にした研修を行った時にも、大きな違いを感じました。彼らは私を尊重してくれ、私の話を傾聴し、私の依頼を受け入れるようになったのです」

「活動を変えたとき、人びとは私たちがそうした価値観を外から持ってきたとは考えませんでした。私たちは彼らと共に生活し、同じ市場や教会に通い、私たちの子どもも彼らの子どもと同じ学校に通っています。パートナーとの研修時に、質問攻めに遭いましたが、私たちに対する敬意を持ってくれました。彼らは、その研修に何かよい点があるはずだと感じており、それが状況を一変させるきっかけとなりました」

「当初、パートナーにその考え方を受け入れてもらうまでに4週間かかりましたが、その後、構築した信頼関係により、CtMへの信頼も深まりました。研修後も時々、パートナーから質問を受けるようになりました。彼らは変革者となったのです」

実行されている ユースの啓発活動

私たちは、すべてのユースが自ら意思決定を行い、差別や不正義に対して声を上げられる社会の実現を目指している。MBMF2では、その実現に向けてコミュニティや専門性を有するパートナー団体と緊密に連携し、ユースが政府・サービス提供者・CSOに自らの声を届けられるよう支援した。また、彼ら自身の身体・将来・彼らに関わる重要事項に関する意思決定が行われるあらゆる場に、彼らが実質的に関与できるよう取り組んだ。

さらに、彼らが安心して意見を表明し、意思決定に影響を与えられるよう、安全で支援的な環境づくりを進めた。

それにより、思春期の若者・ユース、特に疎外され代表性が不十分な集団に属するユースの声を拾い上げることに繋がった。また、彼らが自らの権利と他者の権利の保護・擁護のために必要な知識・スキル・自信を身に付けられるよう支援した。加えて、彼らが自らの声を届け、

自らのニーズに応じてもらえる場を提供した。このようにして、私たちは彼らの声が社会のあらゆる階層の決定権者に届くようにした。MBMF2が支援した活動には、計800人の思春期の若者・ユースが参加した。

私たちは、MBMF2を通じて共に活動したユースアドボケイトの行動力と献身的な姿勢に、日々大きな励ましを受けてきた。以下に、その体験の一部を紹介する。

Tamenech、17歳、エチオピア



Tamenechは、中学生だった頃、自分がいつか誰かのために声を上げるようになるとは、想像もしていなかった。身体に障害があり、歩行が困難だった彼女は、登校できない日が多く、学校では自分が排除されているように感じていた。

エチオピアでの、障害のある女の子と生徒、特に地方で暮らす者、を対象にした、ジェンダー平等・包摂を推進するMBMF2への参加が、彼女の状況を一変させた。彼女は「MBMF2が始まる前は、障害のある生徒が取り上げられたり、自分の経験を話したり、質問できたりする場はどこにもありませんでした」とした上で、「今は違います」と話した。

現在、Tamenechは学校の生徒会の一員として、彼女の仲間や、自身と同じような困難を抱える仲間の代弁者となっている。「生徒会の一員になれたことを、本当に嬉しく思っています」と彼女は語る。

MBMF2により、彼女は羊の飼育という小規模な収入創出活動も始め、それが新たな誇りと自立の源となっている。

Euniceは、彼女の村で最も有力な女の子の権利のアドボケイトである。彼女は13歳の時、チャンピオン・オブ・チェンジ (CoC) というグループに加入した。そのグループは、ユースが自身の生活を形成するジェンダー規範に関して考え、それに立ち向かう取り組みを支援するものである。Euniceは「それまでは、周囲でCEFMUや10代の妊娠を数多く目にしてきましたが、それに対して自分が何かできるとは思ってはいませんでした。ここは忘れ去られたコミュニティでした」と語った。

知識を深め、自信をつけたEuniceは、プラン・インターナショナルで学んだ知識やスキルを共有するため、自身の村で啓発活動グループを結成した。そのグループは、子どもやユースが直面する課題について話し合い、解決策を提案し、その内容を他の人びとと共有することで、変化を起こすよう働きかけてきた。

Euniceとグループのメンバーは、これまでに15件のCEFMUの防止と、約100人の妊娠した女の子の学業の継続を支援してきた。彼女はこう語る:「夢を諦めざるを得なかった女の子を、私はこれまで数多く見てきました。...CEFMUと女の子に対する差別がなくなるまで、私は女の子の権利のために声を上げ続けます」。



Eunice、18歳、モザンビーク

Kim、23歳とKudzi、21歳、ジンバブエ



KimとKudziは、ジンバブエでMBMF2が推進する、女の子主導の女の子のための取り組みである、Amplifying Youth Voices (AYV) に参加していた。

AYVは、女の子とユース女性が自らのSRHRを実現するために声を上げるための知識・スキル・自信を身に付けられるよう支援するとともに、自らの可能性を最大限に発揮できるよう、必要な解決策の実現を後押しした。

彼女たちは、彼女たちの町を代表するユースとして、CEFMU・10代の妊娠・10代の母親の復学を取り上げたて、国会議員らとの子どもの権利に関する議会に参加した。

彼女たちは他のユースと共に、質の高いCSEを受ける機会や手頃な費用で利用できるSRHサービス・情報へのアクセスの改善を求め、政策決定者に直接働きかけた。その反応からは、女の子とユースが直面する障壁への対応について、建設的な対話を進められる可能性があることが示された。

彼女たちは次のように語った:「議員の皆さんが、政策を見直し、それぞれの地域や状況に応じた取り組みを検討する必要性を受け止めてくださったことが分かりました」。

KimとKudziのようなユースは、自ら声を上げ、政策提言を行い、指導者に変革を働きかけている。

「誰もが、ありのままの自分として受け入れられる権利を持っている」

Custodioは10代の頃、学校の友人たちとは違い、自分が他の男の子に惹かれていることに気づいた。彼は孤独を感じ、どうすればよいのか分からなかった。

Custodioはインターネットを通じて、同性愛に関する情報や、モザンビークでジェンダー・性的マイノリティを支援するMBMF2のパートナー団体LAMBDAの存在を知った。LAMBDAを通じて他のゲイの人びとと出会い、自分の気持ちは自然なものであることを理解した。その後、Custodioは家族に自身の性を打ち明け、家族はそれを受け入れた。なかでも、姉妹のOlindaは彼にとって最も大きな支えの一人となった。

現在、CustodioはLAMBDAを代表する活動家の一人として活躍している。彼はコミュニティリーダーや医療従事者と対話を重ね、LGBTQI+の人びとの権利擁護に取り組むとともに、自身のコミュニティ内のLGBTQI+コミュニティが法的支援を受けられるよう支援している。また、HIV検査の受検を後押しし、必要に応じて治療につなげるための支援も行っている。LGBTQI+の人びとは差別を受けることで、適切な医療サービスを利用できない状況に置かれることが多い。

「自分が正しいことをしていると確信できるから、気分がいいです。私が共有する情報が、最終的に人びとの考え方を変えたと確信しています」。



Custodio、22歳、モザンビーク

男性性の 変革

MBMF2では、プラン・インターナショナルが開発した革新的なCoCアプローチを採用し、ユースの主体的な参加を通じてジェンダー平等を推進した。CoCは、すべてのユースをエンパワーメントする取り組みである。女の子とユース女性が自信を育み、自らの権利を理解し、仲間と共に行動する力を身に付けられるよう支援するとともに、男の子とユース男性に、自分自身にも悪影響を及ぼし、ジェンダー不平等を助長する有害な男性性の規範について考え、その在り方を見直すよう働きかけている。私たちはSonke Gender Justiceと連携し、その専門的な知見を活用することで、こうした課題に男の子と若い男性がより積極的に関われるよう、CoCの取り組みを強化した。MBMF2期間中には、7,700人の女の子とユース女性を含む14,000人超のCAYがCoCに参加した。CoCは、ジェンダー規範が自分たちの人生にどんな影響を及ぼしているのかを振り返り、自らその規範を変えていく方法を考える機会を提供している。Yunusのように、こうした学びを通じて自らが大きく変わるだけでなく、周囲の人びとの変化を後押しする存在となる参加者もいた。

「私の願いは、将来の世代が、ジェンダーに関係なく、平等で幸せに、互いに支え合いながら暮らせる世界で生きられるようになることです」

ウガンダの26歳のYunusは、かつては飲んで踊って遊んで暮らすユース男性だった。だが、妻と出会い、プラン・インターナショナルのCoCプロジェクトへの参加以来、それまでの暮らし方を改め、今では家族想いのよき父親となり、自身の過去の経験を例にして、良い男らしさを広め、男の子と男性に対する有害なジェンダー役割の打破を促している。

Yunusは以下のように話した：「幼い頃に父が亡くなりました。学校では上級課程まで修了しはしましたが、学校に通ったのはそこまでです。別の村にあった実家から私はこの漁村に移り、漁師になりました。私たちはいつも早朝に漁に出掛け、夕方に戻って漁獲物を売って、ディスコやパーティーへ出かけました。対岸でパーティーが開かれると聞けば、泊まり込みで行くこともあり。酒に全財産をつぎこみ、遊び回って女性たちと会っていました。毎日がその繰り返しでした」。Yunusは、「避妊をせずに何度も性行為をしました」と、自身の過去を複雑な思いで振り返る。楽しかった思い出の一つひとつにも、その裏にはつらい経験があった。

Holiverはすぐに妊娠し、Yunusは、これからは責任を持って生きていかなければいけないことを悟った。同時期に、彼はプラン・インターナショナルの活動を知った。ユースグループの話し合いに参加し、Yunusはあることに気づかされた。

「自分には周りの人たちに対する責任もあることに気づき、お酒をやめました。そして、そのお金をヤギやニワトリなどの家畜を飼うことに充てるようになり、掃除や洗濯などの家事にも取り組むようになりました」。

現在、Yunusはプラン・インターナショナルでボランティアとして活動するとともに、活動家やファシリテーターとしてCoCの取り組みを支えている。

彼は、SRHRの推進を目的としたCoCの研修セッションを通じて、コミュニティの男の子とユース男性に、前向きで健全な男性性の在り方について伝えている。こうしたセッションを通じて、Yunusはユースがコミュニティで変化を生み出す担い手となれるよう後押ししている。また、女の子やユース女性のグループも同じプログラムに参加し、それぞれの立場からジェンダー規範やジェンダー役割について対話を行う。最終的には両グループが協力して活動を進めるが、その前に、まずはそれぞれが実体験や視点から課題について考え、理解を深めることが重要である。

ウガンダでプラン・インターナショナルは、有害なジェンダーステレオタイプを打破し、ジェンダー平等と女の子の権利を推進する上で重要な役割を担う男の子や男性を育むため、前向きで健全な男性性の促進に取り組んでいる。固定的なジェンダー役割や性別に基づく期待は、女性だけでなく男性にとっても制約となる。対照的に、ジェンダー平等が実現した社会は、すべての人に利益をもたらす。

多くのコミュニティで、家事と育児は女性のみが負う責任とされる一方、男性は家族の事項に関する決定権があり、自身の好きなように振る舞う自由があるとされている。そのような状況でない場合、その家族には何か問題がある、と考える者もいる。Yunusは、有害なジェンダー役割が崩れ始め、すでにコミュニティで大きな変化が起きていることを非常に喜んでいた。

「ユースの考え方や行動の変化はゆっくりではありますが、今まで女性の仕事とされてきたことを、男の子と男性も行うようになっていきます。その変化を嬉しく思います。男の子と女の子が協力し、男の子は女の子を対等な存在として扱っています」

ある日の昼、クワニア湖のほとりにある漁村で、Yunusは叔父のDennisと友人のEddieと共に大通りを歩いていた。3人はかつて一緒に漁をしていた。通りすがりの中庭で、漁師たちが網を掃除していた。Yunusは、1日の終わりにそこでパーティーの準備をしていたことを思い出した。「最近は漁で生計を立てるのが難しくなったけど、生活は充実しています。Yunusの仕事は、私たちのコミュニティにも多くの良い影響を与えてくれました。私たち全員の考え方が変わったのです」とDennisは述べた。

Yunusは、自らの原点や旧友を忘れてはいない。現在は、妻と5歳の娘、1歳の息子とともに新しい家で暮らしているが、以前住んでいた家と農地は友人に託し、その友人がトウモロコシやキャッサバ、マンゴーを栽培している。Yunusの母親も別の地域に土地を購入し、そこへ移り住んだ。Yunusは次のように語る。「私の願いは、将来の世代が、女の子も男の子も、女性も男性も、誰もが平等で幸せに、互いに支え合いながら暮らせる世界を実現することです」

ジェンダー規範の 再形成

支援的環境

プラン・インターナショナルは、思春期の若者・ユースにとっての生活の持続的な改善ができるかは、彼らのコミュニティ次第であると認識している。私たちの長期的な展望は、CAYが健全・安全で支援的な環境で、自身の身体と将来の決定権を保有することである。

こうしたビジョンは、MBMF2がSRHRの推進に取り組む上での中核を成す考え方であった。私たちは、さまざまなレベルで前向きで支援的な環境づくりに取り組んだ。その重要な柱の一つが、思春期の子どもを持つ保護者を対象とした子育てスキル向上プログラム「Building Bridges」である。同プログラムでは、SRHRやジェンダー規範について、保護者と思春期の若者・ユースとの対話を促進する前向きな子育てを重視した。

コミュニティでは、宗教指導者や伝統的指導者など、社会規範の形成に大きな影響力を持つ人びとと連携し、前向きな行動の変化がコミュニティ全体に広がるよう取り組んだ。また、学校がこうした取り組みを学校の活動計画に取り入れられるよう支援するとともに、ユースと協力し、彼らのコミュニティでSRHRに関する前向きなメッセージを発信する活動を進めた。

個人・家族・コミュニティ・国家といった各レベルで、前向きで支援的な環境構築のための私たちの取り組みは実施され、それら各レベルでの理解の深化により、私たちはある動きを生み出した: さまざまな立場の人びとが協力し、各々のコミュニティでユースが自身の身体と将来を完全に自身で決定できるようにさせるための運動である。

ラオス: コミュニティ演劇による保護者の理解の深まり

ラオスでは、避妊に関する社会規範の変革が重要な課題であることが明らかになった。避妊には強い偏見があり、「避妊は既婚女性が行うもの」という考え方が根強く残っていた。そのため、未婚の女性は避妊を利用しにくい状況に置かれていた。

MBMF2チームは、Building Bridgesプログラムを用いて保護者に働きかけ、親子間のコミュニケーションを促進していた。その取り組みの有効性を高める上で、コミュニティのニーズを把握することが重要だったことから、私たちは村のリーダーと緊密に連携し、SRHRに関するコミュニティの規範に働きかけ、保護者のBuilding Bridgesプログラム研修への参加を呼びかけた。

ラオスでは、ユースの多くが祖父母と同居していることを踏まえ、祖父母の参加も推奨した。

ラオスの少数民族コミュニティの中には、ラオス語での読み書きや会話が容易ではない所もあり、情報量の多い研修は彼らに対して最善の方法ではなかった。そこで、MBMF2チームとパートナーは、「講義形式」セッションをグループ演習に換え、写真や動画を用いた議論で理解の促進を図った。また、問題に対する意識啓発を目的とした演劇を盛り込んだ、ユース主導のコミュニティイベントも試行した。結果として、コミュニティ演劇は、保護者(特に識字率の低い集団)の関心の高まりにつながったことが判明した。

そうした臨機応変な対応により、好ましい変化が生まれた。ユースは、彼らの保護者が、彼らが抱えている問題に対し深い理解を示し、以前より支援的になったと話した。私たちは、ラオスのコミュニティに効果的に働きかけ、現地のユースの生活をよい方向に変えるための有効な手段に関して、具体的な知見を得ることができた。

ジンバブエ: コミュニティでの前向きな対話の促進

ジンバブエのブラワヨとクウェクウェ地区では、MBMF2によって、ユースのSRHRに対して支援的な環境へと大きく変化しつつある。Building Bridgesプログラム研修は、コミュニティリーダーの献身的な取り組みと、その影響力により、大きな成果を示すものとなった。

現地のリーダー・保護者・影響力のあるコミュニティ住民で構成された38人のコミュニティリーダーは、Building Bridgesプログラムを用いて、保護者向けにCSEに関する10回分の授業を実施できるよう、訓練を受けた。彼らは、デリケートなテーマの話し合い方の指導を受けた他、授業を効果的に運営するための資料も提供され、重要なSRHR関連事項に関する保護者との対話に備えたコミュニケーションスキルも学んだ。

その成果は明らかだった。研修を受けたコミュニティリーダーは「前向きな子育ての推進役」に認定され、コミュニティ会議で他の人びとに前向きな子育てについて教える機会を与えられた。コミュニティ活動にSRHRに関する議論を取り入れることで、リーダーはそのテーマを一般的なものとし、スティグマの軽減に貢献した; SRHR関連の開かれた対話への障壁となる社会規範を変えるための、重要な一歩となった。

プログラム全体で、チームメンバーは、コミュニティを変革するためには、宗教指導者が果たし得る役割の重要であると訴えた。クウェクウェ地区のSamambwalにある使徒教会の宗教指導者は、前向きな子育てを積極的に取り入れ、伝統的で保守的な組織の中で大きな変化を生んだ。同教派は一夫多妻制などの慣習で知られているが、その指導者は自身の教会で前向きな子育て講座を開催し、信徒たちから好評を得た。

教会の指導者が関るようになり、プログラムの普及活動は著しく強化され、信徒への情報提供が進み、SRHR関連事項に対する理解と受容が広まった。

ジンバブエのコミュニティリーダーで、Building Bridgesを支えるMasango牧師のメッセージ

私はMasangoと申します。ユナイテッド・バプテスト教会の牧師であり、この地域のコミュニティリーダーでもあります。MBMF2に参加し、Building Bridgesプログラムで学んだことを地域の皆さんと共有しています。

私は、性行為・性・恋愛について、保護者が子どもと話し合えるよう支援するための研修を受けただけです。今、まずしなければならないのは、他のコミュニティリーダーを招き、ここで得た大切な学びを地域にどう広げていくかを一緒に計画することです。この学びには、人の生き方を変える力があると感じています。

性や恋愛に関する重要事項については話し合う必要があります。事実、私たちは子どもと話す際に、彼らが私たちの言っていることを理解できるよう、英語の言葉の一部を現地の言葉に換えて説明しました。

「自分の生殖器を現地の言葉で言うのは、下品なことではありません!」、と伝えているのです。

保護者と子どもとの、それらの事柄に関する話し合いへの支援に関してですが、約70%の方がそうした話し合いに大変満足しており、私たちと一緒にコミュニティのワークショップやセミナーに参加する意向を示しています。

「自分の生殖器を現地の言葉で言うのは、下品ではありません!」

もちろん、そのような事柄は大人だけのもの、と考える人は今でもいます。性行為の経験がない相手とは、性行為について話し合うことはできない、と述べた人もいます。しかし、まさにそうした誤った認識こそ、私たちが解消しようとしている問題なのです。

最後に、皆で共有したい重要なテーマとして、LGBTQI+コミュニティにも言及します。私たちのコミュニティでは、彼らを支持する人もいますが、大多数はそうではありません。LGBTQI+コミュニティをどう支援すべきかについて、反対派の人びとに尋ねた際、彼らは反発し、「あなたは本当に牧師なのか」と言われました。牧師として、それは辛い経験でした。私は神に問いかけ、祈らずにはいられませんでした。しかし、私の教会にもLGBTQI+の信徒がいると知り、彼らと話し合い、支えてきました。今、私はコミュニティのリーダーとして、自信を持ってLGBTQI+コミュニティを支援し、反対派と闘っています。

Building Bridges

保護者によるSRHRについてのオープンな対話を支える

SRHや恋愛に関する話し合いは、どの国でも、多くの家族にとって難しいことかもしれない。文化的規範・宗教的信念・世代間差により、それらはデリケートなテーマであり、子どもに対してどのように切り出せばよいかわからない人も多い。保護者は、特に恋愛関係やSRHサービスの利用に関して、教師や医療従事者とは違う形でユースを支援することができる。プラン・インターナショナルには、保護者支援への協力を求める声が多く寄せられている。それは、私たち独自のアプローチが評価されている証でもある。

Building Bridgesプログラムは、そのニーズに応えることを目的としていた。全10回の授業は、二次性徴・性・インターネットの危険性・性的同意・ジェンダー規範など、保護者がデリケートだと感じるテーマが多いテーマに関し、保護者と子どもがオープンに話し合うことができるよう支援した。また同プログラムは、保護者が思春期の子どもの身体的・情緒的・精神的な成長過程を理解し、その成長過程で子どもを支えることができるよう支援した。

MBMF2の各対象国で、2万1,200人超のコミュニティ住民がBuilding Bridgesプログラムに参加した。

授業は、訓練を受けたファシリテーターにより実施された。ファシリテーターには、保護者や宗教・文化的指導者も含まれた。彼らは、体系化された手引きに基づき、実施対象のコミュニティに合わせて授業内容を調整した。授業は、ジンバブエ・モザンビーク・ウガンダ・エチオピア・ミャンマー・ラオス国内のコミュニティで実施され、実施場所に合わせて内容を調整することで、どの地域でも年齢や文化に応じた話し合いが実現した。

保護者は、安全で安心して参加できる場に集い、新たなコミュニケーションスキルを学び、実践するとともに、互いの経験を共有した。こうした取り組みは、保護者や家族に大きな変化をもたらした。以下では、2人のプログラムリーダーが、これまでの成果や直面した課題、そして今後実現したい変化について語ったものである。



Alemi Kebede

ジェンダー・包摂担当調整責任者、プラン・インターナショナル・エチオピア

「私たちの環境では、社会的・文化的なタブーにより、保護者の多くが、子どもと性に関して話し合う準備ができていないと感じています。ですが、Building Bridgesの授業に参加したことで、彼らに実質的な変化がみられました」

「Building Bridgesプログラムは、保護者と思春期の若者が、性行為・性・恋愛に関したテーマを安心して話し合える安全な環境を提供しました」

また同プログラムは保護者に対して、子どもが子ども時代から大人へと円滑に移行できるよう支援するための知識とスキルを習得するための支援をしました。さらに、影響力をもつゲートキーパーでもある宗教指導者が、参加者のグループに関わる機会もありました」

1番驚いたこと

「母親は、市場が開かれる日以外に外出することは、滅多にありません。しかし、同プログラムが始まると、たくさんの母親が、思春期の若者の健康について学ぶために集まりました。彼女たちの多くが、『集まりを通して知識が深まったと同時に、社会的交流も増えた』と話していました。また、父親の間でも大きな変化がみられ、家事を多く担うようになったり、娘のために生理用品を買いに行ったりするようになりました」

「プログラムの最後に、保護者に学んだことに関する意見を求めると、参加者全員が挙手し、授業から得た学びについて振り返っていました」

今後の展開

「障害者の包摂については、今後も改善の余地があります。これまでは、主に身体障害や視覚障害のある人の保護者と関わってきましたが、聴覚障害などのある人の保護者には十分に対応できていませんでした。今後は、障害に配慮した研修の実施や、手話ができるファシリテーターの配置に加え、識字力の違いにも対応できるよう、画像を多く取り入れた教材やプレゼンテーションを活用していきたいと考えています。今後も障害者団体と連携しながら、アクセシビリティの向上に取り組んでいきます」

「保護者が授業に参加したことで、実質的な変化がみられました」



Tonny Ogwang

SRHR・ジェンダー・トランスフォーマティブ・プログラム地域担当顧問、プラン・インターナショナル・ウガンダ

「私たちが関わったユースは、性行為や避妊などのテーマに関して、保護者が強い抵抗感を持っており、彼らもその影響を受けていると語りました。彼らは、保護者がそれを不快に思うと考え、自分たちがそれらのテーマに関して話し合うことさえ避けていました」

「だからこそ、私たちは保護者を参加させる必要性を認識したのです。結局のところ、保護者が子どもにとって最適の教育者なので、彼らを啓発してはどうだろうか、彼らにツールを提供してみるのはどうか、と考えました」

1番驚いたこと

「ラオス・ジンバブエ・モザンビークでは、保護者の多様な宗教的・文化的背景を考慮し、慎重にLGBTQI+関連テーマを取り扱う必要がありました。ですが、十分な配慮をした上で、協力しながら段階的に取り組めば、そうした話し合いは実現できます。事実、現在ではそれらの国々で、保護者や宗教指導者が私たちのところに相談に来て、自分の周りのLGBTQI+に属するユースをさらに支援する方法を尋ねてきています」

今後の展開

「今後は、男性の参加をさらに促すための、革新的な方法を模索しています。男性の参加者の多くが、時が経つにつれて不参加になる傾向が確認されています。

保護者同士が知識を広く共有できるよう、ピア・ツー・ピア学習型授業の導入による後続支援を実施することで、効果を高めることも可能でしょう。また、若年層の保護者は、年配の保護者の前で率直に話せないことがあるため、授業では異なる世代を混ぜない方がよいということも分かりました」

Building Bridgesプログラムの重要性

「対象者がユースだけでは不十分であり、保護者や宗教指導者などのコミュニティのロールモデルとの連携の強化が極めて重要です。変化ははっきりと表れています: 今まで触れられなかったテーマに関して、家族同士で率直に話し合うようになり、ユースの生活は向上しています」

「保護者が子どもにとって最適の教育者なので、彼らをエンパワメントすることが大切です」

気候変動に対するレジリエンス

気候変動に強いSRHRの実現

SRHRに気候変動へのレジリエンスが求められる理由

MBMF2は、危機下でも、将来にわたってユースの権利が保証されることを目指した。その変化が持続するためには、気候変動に対するレジリエンスの構築が必須となる。

気候変動の深刻化は、子ども・ユースのSRHRに重大な脅威をもたらしている。異常気象は医療サービスへのアクセスを妨げ、清潔な水の不足は、月経衛生管理をはじめとする基本的なニーズを脅かしている。さらに、気候変動の影響によって地域社会の貧困や不安定化が進むと、特に女の子とユース女性は、大きなリスクに晒される。暴力の増加に加え、経済的な困窮から、女の子を学校に通わせることを断念したり、CEFMUを選択したりする家庭も少なくない。こうした状況に対する適切な介入が行われなければ、気候変動の長期的な影響により、性的搾取・人身売買・10代の妊娠がさらに増加する恐れがある。

MBMF2はコミュニティと連携し、気候危機が原因でSRHRがないがしろにされることのないよう、以下の4つのレベルでの対策を講じた。

1. CSEに気候変動へのレジリエンスの視点を取り入れる。私たちは、SRHRと気候変動との関連について理解を深めるとともに、子ども・ユースが気候変動へのレジリエンスを高めるために必要な知識やスキルを身につけられるよう支援した。
2. 気候変動対策とDRRの計画にSRHRが組み込まれるようにした。計画策定時にSRHRを優先事項とすることで、重要な医療処置・物資が継続的かつ確実に利用できるよう支援した。
3. 前向きな対処戦略を促進する。気候変動による災害や危機が発生した際にも、女の子が真っ先に教育の機会を失うことのないよう、子ども・ユースが家庭やコミュニティで支えられる環境づくりを進めた。
4. 子ども・ユースの声を政策に届ける。子ども・ユースが気候変動とSRHRとの関連について発信できるよう支援するとともに、気候変動に関する政策対話に参画するための能力強化に取り組んだ。

気候変動に対するレジリエンス構築: 各国の脆弱性の把握

MBMF2の初期段階では、気候変動へのレジリエンスとSRHRとの関連について十分に理解されていないことが明らかになった。この課題に対応するため、MBMF2の全対象国(エチオピア・ラオス・モザンビーク・ミャンマー・ウガンダ・ジンバブエ)では、ボディマッピングの手法を導入した。

CSEの参加者は、気候変動が自らの生活にどのような影響を及ぼしているかを共有しながら、普段は話しにくいテーマについても率直に意見を交わした。例えば、ラオスのあるユース女性は、水不足が月経衛生管理に及ぼす影響について次のように語っている。「災害が起きると、個人の衛生管理、特に月経衛生管理が難しくなります。... また、医療サービスを受けることも困難になります。障害のある人・高齢者・子どもは移動がさらに難しくなり、必要な時に医師の診察を受けられなくなります」。

授業に参加したユースは、水不足などが、生活の快適度・自信・社会的行動に深刻な影響を及ぼしていることに関して議論した。それらの議論によって豊富なデータが得られた。例えば、ウガンダのユースによって共有された経験は、プロジェクトの設計・実施に反映された。

ボディマッピング手法は、抽象的な概念を個人的で具体的な経験へと変え、デリケートなテーマに関して話し合う場を生み出した。同手法により理解が深まり、問題に直面している当事者自身が解決策の土台を築いたことは、重要なポイントである。

気候変動に対するレジリエンス構築: ジンバブエにおけるデジタルを活用した啓発活動と防災

ジンバブエでは、干ばつや洪水などの気候変動による災害が、SRHR関連サービスへのアクセスを妨げることが多い。だが現地のDRR計画では、そうした重要なニーズが考慮されていない場合が多く、そのために、災害が起ると10代の望まない妊娠率や思春期の女の子とユース女性の中途退学率が上昇することが多かった。

MBMF2は、対象コミュニティの災害対策の策定方法に大きな変革をもたらした。危機下での脆弱性の高まりを示す裏づけを現地の政策決定者に共有し、多様なユースを将来の計画の策定過程に参加させ、地方自治体に緊急事態でのSRHRを優先事項と位置づけるようにさせた。

気候変動とSRHRの関連性の認識度の向上に、ジンバブエで実施された革新的なデジタルプログラムである、ユース主導のポッドキャストが大きな寄与を果たした。参加コミュニティの中で、MBMF2のボディマッピング手法に関する議論から着想を得た、ブラウヨのある女の子グループがポッドキャストを制作し、4万5,600人超の登録者を有するYouTubeチャンネルである、Amplifying Girls' Voicesで配信した。

これらのコンテンツでは、気候変動が女の子と女性に特に深刻な影響を及ぼすことに焦点を当て、気候変動とSRHRとの密接な関係について社会の関心を高めることに貢献した。また、ポッドキャストを通じて、デジタルメディアが国内の子ども・ユースの参加を促進する有効な手段であることが明らかになった。

今後の展望: Katja Pellini、プラン・インターナショナル 気候変動担当上級顧問

気候危機は急速に深刻化しており、気候変動へのレジリエンスの強化は待ったなしの課題です。モザンビークでのMBMF2の活動を振り返ると、あのタイミングで事業を開始できたことは大変幸運だったと感じます。2023年に大型サイクロンFreddyが襲来した際、MBMF2の活動はまさに時宜を得たものであり、人びとの命と暮らしを守る上で重要な役割を果たしました。

モザンビークには地域の災害対策委員会が設置されていましたが、多くは出席率が低く、十分に機能していませんでした。しかし、MBMF2が活動した地域では、委員会が定期的に会合を開いて災害対応計画を見直し、行政担当者も委員会との対話に積極的に参加しました。また、私たちは、女の子・女性・障害のある人など、多様な人びとの災害対策への関与の重要性を訴えました。その結果、委員会は本来の機能を取り戻し、2023年にFreddyが襲来した際には、取るべき対応を的確に実施することができました。

私は、この適時な取り組みによって、人びとの命・暮らし・財産への被害を最小限に抑えることができたことを、大変心強く感じています。

MBMF2の実施期間を通して、私たちが関わったコミュニティでは、人びとの生活向上のためのちょっとした工夫を数多く確認することができました。MBMF2各実施対象国は、互いに有効であった取り組みを共有し、それぞれの持つ知識から多く学び合いました。真の解決策を握るのは現地レベルのグループであり、適切なリソースがあれば、彼らがどれ程の成果を上げられるか、想像してみてください。

私は、「気候ファイナンス」とは何かという考え方そのものを、広げていく必要があると考えています。「気候」と聞くと、多くの人はソーラーパネルの設置などを思い浮かべがちですが、気候変動は人びとの暮らしに実にさまざまな影響を及ぼしています。そのため、比較的小規模な資金であっても、人びとが重要な取り組みを実施できるよう、気候ファイナンスの対象をより幅広い活動へと拡大していく必要があります。



経済的 エンパワーメントと SRHR

女の子とユース女性が自身の身体と将来を主体的に選択できるようになるためには、経済的エンパワーメントが不可欠である。貧困や資源へのアクセス不足は、女の子とユース女性を負の連鎖に陥らせる要因となり得る。自身の収入がない場合、交通費やSRHサービスの利用費などを保護者や交際相手に頼らざるを得ないことも少なくない。その結果、自らの身体に関する意思決定の自由が損なわれ、CEFMU・望まない妊娠・対価を伴う性行為・搾取につながる危険性が高まる。MBMF2は、女の子とユース女性が経済的な安定と主体性を獲得し、自身の身体や人生について十分な情報に基づいて意思決定できるよう支援することを基本理念としていた。

MBMF2の経済的エンパワーメントプログラムは、エチオピアのユース女性Abidaの人生を変えた。彼女は選択肢がほとんどない状況から、自立し充実した人生を築き上げたのだ。彼女は、恋愛・コミュニケーション・月経衛生管理・SRH・望まない妊娠・中絶に関する学びを深めた。

ゼロから2つの事業を立ち上げる

21歳のAbidaは、エチオピアの小さな町で育った。両親を亡くした後、家に残されたのは、きょうだいの中で彼女ただ1人だった。外国への移住ではなく、地元のコミュニティに残って就労機会を探そうと決めた矢先に、彼女はボーイフレンドに別れを告げられた。

彼女の人生の転機となったのは、MBMF2とそのパートナーが支援する現地の「Smart Up」で開催された無料の研修に参加したことだった。研修が無料でなければ、受講することはできなかったろう。この研修では、起業・気候変動の影響への対応・事業の立ち上げ方・収入管理・レジリエンス強化など、将来に役立つライフスキルを学んだ。また、健全な人間関係やコミュニケーション・月経衛生管理・望まない妊娠・中絶など、ジェンダー平等・SRHRに関する知識も身につけた。

MBMF2から得たシード資金をもとに、彼女は友人とともに近くの町に店を開いた。「収入に応じて、1日100～150エチオピアブルを貯金するようになりました[...]貯蓄グループに加入し、毎週1,000エチオピアブルを積み立てています...今では事業資金として6万7,000エチオピアブルを保有しています」、と彼女は話した。

Abidaは自宅での農業も始め、手伝いを雇っている。それらから得た知識や技術、収入が、彼女の人生を一変させた。「以前は、服・尊厳キット・生理用ナプキンを買うためのお金を工面するのが大変でした。[...]」

また、月経衛生管理や有害な慣習について十分な知識がなく、保守的な文化の影響もあって、こうしたことを話題にするのが怖かったのです」と彼女は振り返る。

研修後には、彼女のすべてが変わった：「今では経済的な問題から解放され、事業の利益で近くの市場で必要なものを何でも買えるようになりました[...]包括的な研修を通して、SRHR・ジェンダー・起業・ライフスキル・コミュニケーションに対する理解を深めることができました」。

今ではAbidaは、人びとのために啓発活動を行うことに自信を感じている：「今では同僚に、CEFMUや望まない妊娠の防止といったSRH関連問題について教え・話し合い、ピルやコンドームなどの避妊法を教えています」。

彼女の事業は成長を続けており、その成功を彼女のコミュニティの他のユースのために役立てたいと願っている。彼女は、より多くのユース女性が同様の機会を得られるよう、Smart Upセンターの運営継続を望んでいた。「私は、事業の目標達成のために必要な自身の可能性・知識・スキルを把握しています。お金の価値に関しても十分に理解しており、自身の事業を拡大・多角化し、私の地域の失業中のユースに雇用機会を創出する、という明確な展望を持っています。私たちの地区にSmart Upセンターが存在していることで私が得ているような幸せを、あらゆるユースが享受できるべきです」。

「私たちの地区にSmart Upセンターが存在していることで私が得ているような幸せを、あらゆるユースが享受できるべきです」



障壁の打破: Zumeraの物語

生まれつき指に障害のある24歳のZumeraは、地方の村で、人目につかないように育てられた。「障害があるため、家族はずっと私を隠していました」と彼女は振り返る。彼女は学校に通うことを強く望んでいたが、コミュニティでは重荷とみなされ、教育を受ける機会を得られないままだった。

しかし、MBMF2が障害のある人を包摂する形でSmart Upプログラムを実施したことで、Zumeraの人生は大きく変わった。彼女は初めて、自身のニーズに応じた研修を受ける機会を得た。それは、ライフスキル・起業・生殖に関する健康について学ぶ研修に加え、障害のある人も参加しやすいよう配慮された情報通信技術研修だった。

「Smart Upプログラムに参加する前は、とても不安でした。保健センターを訪れても、自分の悩みや症状をうまく伝えることができませんでした。医療従事者からは、『障害があるのに、なぜここに来た?妊娠でもしたのか?』といった心ない言葉をかけられることもありました。でも、啓発活動が行われてからは、医療従事者の理解が深まりました。ユース向けの診療スペースも整備され、私たちがきちんと受け入れてくれるようになったので、今では安心して受診できるようになりました。サービスを利用するだけでなく、医療従事者とも率直に話し合えるようになりました」。

また、同プログラムでは、現地の医療従事者と連携し、障害のあるユースに敬意をもって接し、必要なサービスを提供できるよう支援した。その結果、Zumeraは安心して医療を受けられるようになった。

新たなスキルと少額の助成金を得た彼女は、紅茶・コーヒー事業を立ち上げ、経済的自立の達成とともに、彼女が所属する障害がある人の団体のロールモデルとなった。現在、彼女はSRHR・ジェンダー平等の啓発活動を行い、他の障害があるユースの手本となっている。彼女は「MBMF2のおかげで、私は多くの障害がある人びとのモデルとなることができました」、と話した。

ユース女性への投資

協働による革新

プラン・インターナショナルは、パートナーと緊密に連携しながら、子どもの権利の実現と女の子の平等の推進に取り組んでいる。特に現地化を重視し、権限やリソースを現地の組織・アクターへ移譲することで、現地の実情に即した持続可能な開発を推進している。私たちは、持続的な効果を生み出し、ジェンダー平等を推進する社会運動を強化するため、多様なCSOと協働している。こうした現地化の取り組みを通じて、プラン・インターナショナルとパートナーは、能力強化・権限の移譲・知識や資源の共有といった相互の学びと成果を得ている。その結果、子ども・ユースの声がより政策や事業に反映されるようになり、より質の高いプログラムを、より多くの地域で、より多くの人びとへ届けることが可能となっている。

MBMF2では、対等な協力体制は極めて重要である。すべての実施対象国で、私たちはパートナーと緊密に連携し、人権に基づくジェンダー・トランスフォーマティブ・アプローチを推進した。それらのパートナーはそれぞれの活動分野の専門家であり、私たちは彼らのプログラム実施だけでなく、その設計も支援した。

MBMF2は、プラン・インターナショナル全体のプログラムやプロジェクトの共創・共同設計・共同リーダーシップの推進力となった。私たちは、女性主導のグループ・LGBTQI+ネットワーク・ユース主導の組織など、現地パートナーの組織的・技術的・財政的能力を強化した。私たちは、現地化は単なる責任や資金の移管ではなく、現地の体制への長期的な投資が求められるものであると確信している。

SRHR分野での専門知識の結集・コミュニティとの強い関係性・効果的なサービス提供を基盤とした、MBMF2の実施を支えた革新的な連携関係を以下にいくつか示す。

現地のパートナーとの緊密な連携

MBMF2は、ウガンダ・エチオピア・モザンビーク・ラオスで、国際家族計画連盟(IPPF)に加盟する現地のSRHRの組織との連携により、包摂的できめ細かいユース向けのSRHRサービスを、利用しやすくすることに力を入れた。Reproductive Health Uganda・Family Guidance Association of Ethiopia(FGAE)・Mozambican Association for Family Development(AMODEFA)などの組織との連携により、MBMF2は幅広いユース、特に低所得層のコミュニティのユースに支援を提供することができた。

私たちは各国政府の医療施設と緊密に連携し、妊娠検査・避妊・中絶ケア・HIV検査といった、必要不可欠な医療サービスが、今後も引き続き利用しやすい状態であることを保証した。コミュニティ医療従事者や現地のパートナーの協力を得て、移動型のサービスを導入し、医療サービスが不足しているコミュニティが取り残されないようにした。

サービス提供に加え、IPPF加盟組織は政策対話や医療制度の強化においても極めて重要な存在であった。特にエチオピアとモザンビークでは、FGAEとAMODEFAにより、医療従事者の研修・インフラの改善・必要な物資や人材が提供され、ユースのためのサービスが機能するようにした。また、ユースが危険を感じたり偏見にさらされたりすることなく、安全で秘匿性が守られ、色眼鏡で見られることのない環境でSRHRサービスを利用できるよう、学校や他のコミュニティ内に「ユース向けコーナー」が設置された。そうした介入策は、ユースのニーズに重点的に応えていく上で協力体制を取ることがいかに重要かを示すものである。

MBMF2の重要な取り組みの1つは、各国政府の医療従事者との連携である。包摂的で年齢に応じた偏見のない医療サービスを提供できるよう、その能力強化を支援した。研修では、専門的な知識や技術の向上に加え、ジンバブエ・モザンビーク・ミャンマー・ラオスでは、LGBTQI+のユースや障害のあるユースに対する偏見につながりやすい個人の価値観や社会規範についても取り上げた。その結果、医療従事者はユースとのコミュニケーションを深め、一人ひとりを尊重し、共感的に対応できるようになった。また、政府の医療従事者はパートナー団体に対する技術支援も行い、SRHRサービスの提供能力に加え、地区保健情報システムなどの公的な保健情報システムの活用・分析能力の向上を支援した。その結果、パートナー団体は、エビデンスに基づく啓発活動をより効果的に実施できるようになった。

MBMF2におけるIPPF加盟組織との多様なパートナーシップは、それぞれの強みを生かした相互補完的な関係を築くものであった。これにより、ユースのSRHRの実現に向けた責任を共有し、協働して取り組むことができた。また、IPPF加盟組織、政府の医療制度、コミュニティ組織が連携することで、ユースが差別を受けることなく、質の高いSRHRサービスを安心して利用できる環境の整備が進められた。

月経カップ、ウガンダ

ウガンダでは、今でも月経が女の子の欠席の原因となっている。学齢期の女の子の60%以上が、月経中に定期的に欠席しており、12歳~18歳の女の子の約4人に1人が、月経開始により中途退学している。

プラン・インターナショナルはその状況を変えるため、MBMF2の実施期間中、フィンランドの月経カップブランドLunetteと提携した。私たちはLunetteと共に、ウガンダの学校で月経カップを配布し、その使用を支援する環境づくりに取り組んだ。

SRHR事業コーディネーターのSemmy Achiolは「カップの配布に加え、その使い方の指導や学校やコミュニティリーダーとの緊密な連携、男の子に対する月経に関する情報提供を行います。[...]ウガンダで月経カップはまだ比較的新しい存在ですが、北部ウガンダのリラ市での需要は高いです。ユースは、持続可能で使いやすく、清潔に保ちやすい月経用品を求めています」、と説明した。

Lunetteにとって、その連携関係は単なる製品の提供以上の意味を持っていた。CEOのAleksandra Oklińskaは「月経衛生管理は、単なる衛生問題ではなく、人間の尊厳・機会の平等・充実した人生を送る権利に関わる問題です[...]数字の背後には、それぞれの物語・名前・失われた未来があります。だからこそ、私たちにとってこの問題に関与することは極めて大切なです」、と述べた。

試験事業の成功により、その連携関係はウガンダの他の地域や、ミャンマーなどの国々でも展開された。それは、革新的な企業とMBMF2のようなプログラムが連携することで、障壁を打破し、女の子が就学を続けられるよう支援することが実現可能であることを示している。

包摂的なSRHRの実現、ミャンマー

紛争をはじめとする厳しい情勢が続くミャンマーでは、ユースにSRHに関する情報を届けるためには、専門的な知識だけでなく、地域との信頼関係も欠かせない。MBMF2は、LGBTQI+当事者を中心とする現地団体Kumudraと提携し、あらゆる若者が安全にSRHRに関する支援を受けられるよう取り組んだ。

Kumudraは、「政治情勢の悪化により、各地で武力衝突が頻発しているため、活動はできるだけ目立たない形で進める必要があります。また、教育資材も可能な限り迅速に配布しなければなりません。活動を実施する際には、総務局へ報告し、許可を得ることが求められます」と説明する。このように地域に根ざした目立たない形で活動を進めたことで、MBMF2は、ユースが安心して利用できない公的機関に依存することなく、コミュニティとの信頼関係を築きながら支援を展開することができた。さらに、プラン・インターナショナルとKumudraは、HIV検査・家族計画・性感染症検査・メンタルヘルスに関するカウンセリングなどのサービスを提供し、ミャンマーにおける思春期の若者・ユース向けのSRHサービスの不足という課題の改善に貢献した。

Kumudraにとって、サービス提供に加え、疎外された集団への支援も特に重要な活動であった。同組織は、SRH関連情報の提供・包摂的な政策のための啓発活動の推進・LGBTQI+の権利とジェンダー平等に関する啓発セッションの実施・女性主導の組織との連携による女性のエンパワーメントの強化にも取り組んでいる。

国内情勢は厳しいが、その連携関係により、MBMF2はユースへのCSEの提供・彼らのSRHサービスの利用促進・広範な社会運動におけるジェンダーや権利に関する議論の定着化を達成した。それは、極めて不安定な状況下でも、現地のリーダーシップと人権に基づく行動が組み合わされば、持続的で変革的な変化を生み出し得ることを示す好事例であった。

謝辞

プロジェクトチームとパートナー

エチオピア

Yene Raye II プロジェクトチーム

- Professional Alliance for Development
- FGAE
- Ethiopian Center for Disability and Development

ウガンダ

I Decideプロジェクトチーム

- Reproductive Health Uganda
- Communication for Development Foundation Uganda
- Lira District Union of Persons with Disabilities
- African Center for Trade and Development

コミュニティベースの組織:

- AYUA Uganda
- Community Development Shield Uganda
- Change Lead Agency for Social Change
- Dreams Rescue Foundation
- Friends of Good Will
- Growth Care Uganda
- Global Support Development Initiative Uganda
- Global Youth Foundation
- Hosanna Community Bridge
- Lango Youth development Network
- Nation Youth Empowerment
- Safe Aid Uganda
- Shelter for Community Transformation

モザンビーク

Mandzikuプロジェクトチーム

- AMODEFA
- Associação LAMBDA
- Association for the Promotion and Development of Women

ジンバブエ

My Body My Futureプロジェクトチーム

- Zimbabwe National Council of Disabled Persons of Zimbabwe
- Sexual Rights Centre Zimbabwe
- Intwasa Arts Festival koBulawayo

ラオス

Anakhot Khong Khoi 2プロジェクトチーム

- Promotion of Family Health Association
- Gender Development Association
- Women with Disabilities Association

ミャンマー

Me Me Kanda, Me Me Anagat Paプロジェクトチーム

- Kumudra Social Life Support Association

本報告書の寄稿者

表紙

画像:

Gugulethu、プログラムのユース参加者、ジンバブエ; Tan、プログラムのユース参加者、ラオス

p. 1-2 序文

画像: Euniceと彼女の友人たち、モザンビーク

p.11-12 CtM

独立したコンサルタントであるHelen Parryが、プラン・インターナショナルのために実施した、Conversations that Matter Learning Review(2024年)

p.13-14 実行されているユースの啓発活動

- [Tamenech: 女の子のリーダーとしての私の未来、プラン・インターナショナル・エチオピア](#)
- [Luulin homouuttani kiroukseksi, jonka yritin häätää rukoilemalla、プラン・インターナショナル・フィンランド、文: lida Riekkö](#)

p.15-16 男性性の変革

- [Yunus näyttää uudenlaisen miehen mallia、プラン・インターナショナル・フィンランド、文: Kalle Heino](#)

p.17-18 支援的環境

独立したコンサルタントであるHelen Parryが、MBMF2jからの知見・評価のために作成した、支援的環境戦略に関する国別概要

p.25-26 協働による革新

- [Plan ja Lunette parantavat kuukautisterveyttä、プラン・インターナショナル・フィンランド](#)

p. 27-28

画像: Chidadiso Francisca・Lindiwe・Natasha・Sisassenkosi、ジンバブエ

撮影者: Mikko Toivonen、プラン・インターナショナル

イラスト: [Amazink Studio](#)

すべての画像と体験談の使用に関する同意は、事前に得ている。

プラン・インターナショナル

Emebet Wuhib-Mutungi・Tonny Ogwang・Henry Salas・Katja Pellini・Solène Vadé・Annukka von Kauffman・Eeva Ervamaa・Eeva Kirjasniemi・Anna Salmivuori・Mari Luosujärvi・Alemi Kebede・Kalle Heino・lida Riekkö・Ella Lautaniemi・Anna Könönen・Mikko Toivonen・Jacqueline Dragon・Helen Parry(独立したコンサルタント)

報告書作成

プロジェクト責任者・編集支援・内容調整/制作: Leena Mubarak, SRHR担当上級顧問、プラン・インターナショナル・フィンランド

クリエイティブディレクター・編集開発・コンテンツキュレーター・デザイン: [Ravel](#)



SUOMI
FINLAND

プラン・インターナショナルについて

プラン・インターナショナルは、子どもの権利を推進し、誰もが平等な世界の実現を目指し85年以上にわたり世界80カ国以上で活動する国際NGOです。一人ひとりの子どもが本来持つ力を引き出すことで地域社会に前向きな変化がもたらされることを信じて、子どもや若者、さまざまなステークホルダーとともに活動しています。特に、貧困や暴力、差別や排除によって弱い立場に置かれている女の子の支援に力を入れています。

子どもや女の子たちが直面している不平等を生む原因を明らかにし、その解決にむけ取り組むことで、子どもたちが生まれてから大人になるまで寄り添い、自らの力で困難や逆境を乗り越えることができるよう支援します。

**誰もが平等な世界の実現に
むけて、歩みを止めずに
進んでいきます。**

本報告書はMFAの支援を受けている。本報告書に記載された見解は著者のものであり、必ずしもMFAの見解ではない。

プラン・インターナショナルのSRHRに関する活動の詳細は以下を参照のこと:
plan-international.org/SRHR

プラン・インターナショナル・フィンランド
Teollisuuskatu 13
00510 Helsinki
Finland

plan-international.org

facebook.com/planinternational

X.com/planglobal

instagram.com/planinternational

linkedin.com/company/plan-international

youtube.com/user/planinternationaltv